手紙を書く騎士
― 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について ―

青 木 三 陽

1．宮廷叙事詩人の「学識」と「書物」 ― 宮廷時代の始まりからハルトマンまで

中世ヨーロッパ史において、12 世紀という時代が学術と思想の発展に果たした役割については言うをまたないであろう。この時代、古典古代の学問の再輸入や、異文化圏からの新しい知識の流入により、ヨーロッパの知を巡る状況は一変した。後のスコラ学の大成はこの 12 世紀が準備したものである。だが、その革新の担い手は、もっぱら聖職者[1] に限られていた。ラテン語と俗語というバイリンガリティが中世文化の大きな特徴の一つであるが、死語である前者を人工的に習得し、書物へ接近する手段を獲得しうる彼らだけが、学問の発展に寄与することができたのである。

ところが、この 12 世紀という時代は、俗人の間に新たな文学が誕生し、発展していった時期でもある。完全な口承性に縛られていた俗語文学が、徐々に、聖職者の占有物であったはずの文字文化を取り込み始め、やがて宮廷叙事詩[2] の完成にいたっては、詩人ははっきりとそこへの依拠を述べるようになる。あれほどはっきりと分かたれていた二つの領域の境目が、この点に関しては変化の兆しを見せはじめ、聖職者の特権に対して異議が申し立てられはじめる。

そのような文化的背景の中、13 世紀初頭になって成立したのがヴォルフラムの『パルツィヴァール』である。本稿の目的は、この、宮廷叙事詩の集大成とも呼ぶべき作品を、聖職者と俗人

---

[1] 本稿で「聖職者」という言葉が使われた場合、それは die Geistlichen の訳語であり、すなわち「俗人」die Weltlichen という言葉の対立概念として用いられたものである。聖職禄を受け取る在俗の司祭、司教や律修参事会員だけを指す言葉ではなく、修道士達を含んだ広義の言葉であることを了解されたい。

[2] Höfische Epik（宮廷叙事詩）と Höfischer Roman（宮廷風物語）という二つのドイツ語は、現在ほぼ区別なく同じ意味で用いられる。だが、前者はしばしば、宮廷に属する人間を受容者として想定すると言う意味で、英雄叙事詩等をもひっくるめた中世の俗語叙事文学の総称として用いられる場合がある。そのため、素材に関して、『エネイート』や『エーレク』『イーヴァイン』等、フランスの romans d'antiquité や romans courtois に相当する作品のジャンル名をより厳密に呼称するには、宮廷風物語という語の方を選択するべきなのであろうが、ここでは本邦での慣例に従い、かつ英雄叙事詩という言葉との対比をより明確にするために、敢えて前者を用いた。したがって以後本稿でこの言葉が登場する場合、それは全て狭義で用いられたものである。Vgl. Bumke, Joachim: *Deutsche Literatur im hohen Mittelalter.* München 1990, S.63.

という二つの文化のせめぎあいという観点から観察することにある。そのために、まずはヴォルフラムに至るまでのドイツ語圏の詩人の、文字文化に対する意識の変化を具体的に詳しく見ておく必要があるだろう。

ドイツにおいて、叙事詩人の自己主張が作品上に表れるようになるのを見るには宮廷時代の始まりを待たねばならない。それまでの文芸作品は圧倒的に詠み人知らずであった。12 世紀になってようやく、世俗諸侯の宮廷で文芸活動が組織化され、文字で書かれた原典をもとに母国語の創作活動が行なわれるようになるが、その段階にいたって初めて、口承で伝えられてきた英雄叙事詩の類も固定したテクストとして書き記されるようになる。宮廷時代に始まる新しい文学ジャンル、宮廷叙事詩の特徴を明確にするためには、この英雄叙事詩との比較を行なってみればよい。英雄叙事詩の題材は「我々に語り継がれた古き物語の中のいみじきことども」であり、人々に「よく知られた」ものである。[3] これはドイツ語に限らず、ゲルマン語の英雄詩全般に広く見られる表現なのであるが、つまり、物語の素材については、口承という手段による詩人と聴衆の間の知識の共有を（少なくとも見かけ上は）前提としているのである。彼らの知識は読書により得られたものではない。このような前提の下で、詩人の役割は物語の「再現者」か、あるいはよく言って「仲介者」以上のものではありえない。詩人は自分の名すら名乗らず、身分、出身、聴衆との関係、その他何ひとつ情報を与えてはくれない。あたかも、共有された記憶と伝統そのものが語りの主体となっていたかのようである。[4] 一方、やはり母語で創作活動を行なうが、土着のものでない物語を題材とする宮廷叙事詩人は、作中で、それもしばしば冒頭部分で、自らの名を力を入れて名乗るようになる。物語の単なる再現者に留まらない、Autor-Erzähler の誕生である。そしてその作品には、「原典物語」âventiure についての新しい情報が付け加えられるようになる。12 世紀に始まりフランス語圏からドイツ語圏へと流入してくる宮廷叙事詩の特徴として、その原典となった物語の口承性を否定し、自分が題材を「書物」から得たことを強調し始め、同時に、自らの作品もまた「書物」として紹介するという点がある。

ドイツの宮廷叙事詩人もまた、フランス語、あるいはラテン語の原典をふまえて創作していたが、彼らの言葉を信用するならば、その中には、膨大な原典研究を行なった後に、ある特定の書物を使用することに定めた者もいた。自分こそが、「数々の本の中から」「真実の」「正しい」物語を見つけた、というわけである。つまり、あたかも史料批判を行なって信頼できる文献のみを

---

[3] Vgl. *Das Nibelungenlied*: Nach der Handschrift C. Hrsg. v. Ursula Hennig. Tübingen 1977, 1. Strophe.
「我々の古い物語の中には多くのいみじきことが語り継がれている。誉れ高い英雄や、激しい戦いや、喜び、饗宴、悲しみ、苦しみ、勇士達の争いなど、多くのいみじき物語が語られるのを、これからあなた方は聞くことになるであろう」。

[4] Warning, Rainer: Der inszenierte Diskurs. Bemerkungen zur pragmatischen Relation der Fiktion. In: D. Heinrich / W. Iser (Hrsg.): *Funktionen des Fiktiven*. München 1982, S.195.

用い、正確な情報源を確保したとでもいうような — 興味深いことには聖職者の歴史記述とよく似た — 主張をし始めるのである。今日、こういった作業の具体的な状況については何も分かっていないに等しい。だが、書物が貴族の立派な奢侈品とみなされ、鍵をかけて保存される時代である。多くの場合、詩人は権勢ある有力者から、作品の製作依頼とともに原典となる書物を受け取っていたのであろうから、書物を読みあさって原典となるものを探し求めるという言葉は、一般に、受容者に対して何らかの働きかけを行なうための常套句であったとみなされている。

初期の宮廷叙事詩人達は自ら「僧」pfaffe を名乗っていた。身分不明の者も、それに近い立場であったと推測される。それもそのはずで、この時代にはテクストとなって伝わる文学、すなわち文字文化は、ほぼ完全に聖職者の占有物だったのである。現代人の抱きがちなイメージとは異なり、中世盛期に至るまで「騎士」と「学識」は決して並び立つ概念ではない。彼らのほとんどは文盲であった。聖職者だけが所有する読書能力が、原典たる書物への接近を可能にした。逆の言い方をすれば、12 世紀を通じて、書物という権威を持ち出すことこそが、ラテン的学識と修辞学を身につけていることを示すための手段として宮廷叙事詩の詩学にとって基本的なものだったのである。[5]

ところが、12 世紀末に至り、宮廷叙事詩人の中にも自ら「騎士」を名乗る者が現れる。ハルトマン・フォン・アウエである。

> 一人の学識ある騎士が、様々な書物を読んだ。そして、時間をもっと有効に利用できないときには、詩作をたしなんだ。人々が喜んで聞きたがることに、彼は全力を注いだ。その者の名はハルトマン。アウエの人であった。彼がこの物語を書くのである。[6]

彼こそは、ドイツではじめて「騎士」を名乗った詩人である。と同時に、アルトゥースロマーンという題材をドイツに持ち込んだ詩人でもあった。文字文化がそれまで完全に聖職者の占有物であったことを考えれば、彼のこの発言は画期的であり、書物文化を俗人世界に開放した、という現代の評価もあながち過大評価とは言えまい。だが、そのハルトマンも、創作態度に関してはそれまでの宮廷叙事詩人のそれからさほど大きく外れるわけではない。騎士でありつつも、彼には「学識があり」、その能力を使ってあくまで「書物の中に」題材を求める。ハルトマンについて

---

[5] Vgl. Schirok, Bernd: Ein rîter der gelêret was. Literaturtheoretische Aspekte in den Artusromanen Hartmans von Aue. In: Keck, Anne / Nolte, Theodor (Hrsg.): *Zu hove und an der strâzen.* Leipzig 1999, S.184ff.

[6] Hartmann von Aue: *Iwein.* Hrsg. v. Georg Friedrich Benecke und Karl Lachmann. Neu bearb. v. Ludwig Wolf. Berlin 1968, V.21-30. 『哀れなハインリヒ』冒頭にも同様の発言が見られる。同じアルトゥースロマーンである『エーレク』は冒頭部欠落のため不明。

は、聖職者になるべく正規の教育を受けた後、何らかの事情で還俗したものと推測されている。このようなキャリアの踏み方は一般的でこそないが、財産相続予定者の死亡などによって、稀に生じることのあるケースであったらしい。[7]

聖職者にせよ、騎士を名乗るハルトマンにせよ、彼らの文学の根本となっていたのは、正規の教育を受けて獲得した「学識」と「書物」であった。では、彼らがわざわざそのような自己主張を行わなければならない理由はどこにあったのだろうか。この問に対する回答の一部は、伝統というものに対する中世の人間の態度を観察することで得られよう。フェルデケやハルトマン、それにゴットフリートといった詩人の言葉から読みとれるのは、「書物から知識を得た者こそ正しい知識を持つ」という主張である。文学においてもっとも顕著に表れているように、中世においては伝統の力が非常に大きかった。近代人は独創を尊ぶが、中世の人々は伝統を尊重して革新を嫌った。それゆえ中世において何らか新たな改革を行なおうとするときには、古い理想の復活という形がとられたのである。宮廷叙事詩の内容を見てみても、一般に、今は失われてしまった過去の理想への回顧という形をとる。[8] 中世の作品を読むとき、我々は聖書や教父も含めて過去のテクストからのおびただしい引用に悩み、これを避けて、作者自身の独創の箇所をさぐろうとする。しかし当時の作品にとっては、逆に過去の権威の引用こそ、むしろ本質的なものだったのである。こうした事情下においては、剽窃という概念を当てはめることはできないだろう。彼らにとっては、書物は過去の権威として、共同体の記憶に拠らない物語に真実味を要求する受容者に保証を与える、という機能を担っていたと考えられるのである。[9] これが、12 世紀を通じて宮廷叙事詩人達に見られる共通の特徴である。

2．文盲の告白 — ヴォルフラムの「自己弁明」

ハルトマンに至るまでの宮廷叙事詩にはこうした、物語の出典と自らの学識についてほとんど

---

[7] Vgl. Jackson,William H.: *Chivarly in Twelfth-Century Germany.* Cambridge 1994, S.195. レゲンデ的物語『グレゴリウス』で主人公が少年時代に経験する修道院での生活の描写は、ハルトマン自身の体験に基づくものとも言われている。グレゴリウスは正規の教育を受けてラテン語と諸学を修める。だが、修道院を離れて騎士として生きていくという決断を下した瞬間に、ラテン語を捨ててドイツ語で長広舌をふるい始め、修道院長を驚かせる。このシーンは、中世文化の本質をなすバイリンガリティを象徴していて非常に印象的である。そしてグレゴリウスは、聖職者となるための教育を受けて身につけた読書能力のおかげで、自らの出生の秘密が記された石版を「読む」ことになるのである。Vgl. Hartmann von Aue: *Gregorius.* Hrsg. v. Hermann Paul. 11. Aufl. Besorgt v. Ludwig Wolff. Tübingen 1966, V.1625ff..

[8] Vgl. *Iwein,* V.1-20.

[9] Vgl. Wand, Christine: *Wolfram von Eschenbach und Hartmann von Aue. Literarische Reaktion auf Hartmann im Parzival.* Herne 1989, S.204.

常套句となった表現が存在していたことを前提としたうえで『パルツィヴァール』を見ると、詩人は書物について非常に興味深い発言をしていることが分かる。本編が開始される直前に置かれた、いわゆる「自己弁明」Selbstverteidigung と呼ばれる部分である。

> 私の正しさを目、耳の両方で確かめたい人を、欺こうとは思わない。盾とる職が私の本務である。私の勇敢さが示されないのに、詩作の点だけで私を愛する人がいたら、その人には知性が欠けているのだと思われる。立派な婦人のミンネを求めておきながら、その方のミンネに値する働きを私が盾と槍とで成し遂げられなかったとしたら、その方は私に対してそれ相応の態度をとられるがよい。騎士的な行為によってミンネを求める者は、高い賭金を賭けて勝負しているのだ。御婦人方がおべっかととらなければ、私はあなた方にまだ知られていないお話しをして、この物語を続けさせていただく。そのことを私に望まれる方は、この物語に書物を期待しないでいただきたい。私は一文字も知らない。かなりの詩人達がそこからパン種を取っているのだが。この物語は書物の舵なくして進む。この物語が書物だと思われるよりは、湯殿でタオルも持たずに裸でいるほうがましだろう。柴の束さえ忘れなければ。(115, 8ff) [10]

アルトゥースロマーンの先人たるハルトマンと同じく、ヴォルフラムは自らの存在を、何よりもまず「騎士」として規定し、ことさらにそれを強調する。[11] 「騎士」の存在と「ミンネ奉仕」というキーワードの結びつきにより、この作品の方向性が暗示される。宮廷叙事詩とは、すべからくアムール・クルトワ、すなわち貴婦人に対する騎士の愛、その愛のための騎士の冒険を中心テーマとする文学である。「自己弁明」は、詩人を宮廷社会の一員に加えつつ（これはハルトマンと同様である)、共同体の内部からその理想 — クルトワジー — を追求した物語がここから展開されるという宣言なのである。語り手が 'wir'と'uns' で言い表している人間集団は「文学的受

---

[10] 『パルツィヴァール』ならびに『ヴィレハルム』、『ティトゥーレル』本文からの引用は Lachmann, Karl (Hrsg.): *Wolfram von Eschenbach.* Berlin 1833, 5. Ausg. Berlin / Leipzig 1891 により、( ) に段落、行数を入れて示す。自身の文盲については『ヴィレハルム』でも同様の発言がある。「私の心はあなた(神)の力を感じます。書物の中に書かれていることは、私には分かりません。私にはその術がありません。私に語る力があるとすれば、それは私の心から来るものです」 *Willehalm,* 2, 18-22.

[11] 「盾取る職が私の本務である」の原文は 'mein art ist schildes ambet'。art とは血統、血筋を表わす言葉でもあるから、その意味で訳すれば「生まれと教育によって、私は騎士である」と、身分的な意味合いが増す。ヴォルフラムは詩作によってではなく、男らしさによって婦人に賞賛されることを望む。これは、「騎士と聖職者のどちらが恋人としてふさわしいか」という、当時好まれたラテン詩のテーマのパロディーとも受け取れる。それまでこのテーマを論じるのは聖職者に限定されており、勝利を収めるのは当然彼ら自身であった。ヴォルフラムは、この箇所で騎士を名乗り、聖職者に先んじることで、世俗貴族の立場を代弁していると言えるかもしれない。Vgl. Bumke, Joachim: *Wolfram von Eschenbach.* 7. Aufl. Stuttgart 1997, S.4.

容者」、すなわち文学的知識と関心の方向性を等しくし、他とは区別された集団である。[12] この点においては、ヴォルフラムの立場はハルトマンのそれと異なるものではない。ところが、「まだ知られていない」物語の権威付けということに関して、ヴォルフラムは宮廷叙事詩の伝統からはなはだ逸脱することになるのである。ヴォルフラムは、自らが文字を読めない人間であると告白し、この物語が「書物の助けなくして進んでいく」と述べる。すなわち、新しい物語に必要な、真実性証明のプログラムが、一見完全に否定されてしまっているのだ。

はたして、この発言を自伝的要素としてとらえることは可能なのであろうか。たしかに、文盲であることと、長大で複雑な叙事詩の作者であること、この二つは当時において必ずしも矛盾するわけではない。現代の我々には、口承という手段で文学を考える術が失われているのであり、中世の人間の記憶・伝承力について安易に結論に飛びつくのは控えねばならない。そして、この時代の「学識」というものについての一般的な概念も考慮に入れねばならない。13 世紀において、「学識ある者」litteratus とは、正規の学校教育を受けてラテン語の読み書きができる者のみを指した。「聖職者」clericus とほぼ互換的に使われる語である。つまりそれ以外の者は、如何に広い知識を誇ろうがおしなべて illitteratus なのである。

むろんこのような厳密な区分は理論上のもので、実際の宮廷には、正規の教育は受けていないが多少の読み書きはできる、という者も存在したらしい。「教養人のごとき騎士」miles quasi litteratus は世俗貴族社会における一つの現象であった。[13] 知識を手に入れる手段としていわゆる耳学問というものも考えられるだろう。ヴォルフラムもそのような一人で、「文字を読めない」との告白もこの意味でなされたのかもしれない。なるほど、ヴォルフラムは情報提供者（er las der lande chrônicâ 455, 9「彼らはそれらの国の年代記を読んだ」）や受容者（diu diz mære geschriben siht 337, 3「この話が書かれているのを見た女性は…」）の読書能力を疑わず、また、自己弁明でも「耳と」「目で」という、文学の二つの受容方法をほのめかしているのにも関わらず、自分自身が「読んだ」las とは全編を通じて一度も口にしない。その点も、少なくとも彼の知識のいくらかが耳によるものであったことを裏付けるように思われるのだが、しかし、語り手としての彼が文盲の仮面を被っているのだとすれば、それは当然、慎重に計算された上での行為ということになろう。本来ならばこの問題の解明に大きく寄与するはずの、ヴォルフラム独特の文体についての議論に関しても状況は同じである。たしかに、すでにヴォルフラムの同時代人が彼の語り口を俗人特有のものとみなしていたらしい。[14] しかし、その独特の文体が彼の学識のレ

---

[12] Bumke, Joachim: *Die Blutstropfen im Schnee. Über Wahrnehmung und Erkenntnis im "Parzival" Wolframs von Eschenbach.* Tübingen 2001, S.113.

[13] Bumke (1990), S.219.

[14] 「俗人 leien で彼よりうまく物語った者はいない」。Wirnt von Grafenberg: *Wigalois : der Ritter mit dem*

ベルとどのような関係にあるのか、それを解き明かすのは非常に困難なのである。ヴォルフラムの実際の学識の程度については、シンタクスや語彙などの側面からも分析が試みられてはいる[15]が、結局、文体そのものからは最終的には解明されえない問題として残されていると言わざるをえない。

だが、より重要なのは、物語が進行するにつれ、彼の文盲の告白とはどうしても相容れない印象を与える情報が受容者にもたらされるという事実である。『パルツィヴァール』の実際の原典は、テクスト比較により、クレチアン・ド・トロワの『ペルセヴァル』であったことがほぼ確実視されているが、他にも、作品を成立させるための資料としてフランス語やケルト由来の多くの文献の存在が推測されている。そのソースの広さと共に、占星学、神学、鉱物等についての記述から垣間見えるヴォルフラムの知識の深さは、彼が大変な読書家であり、ラテン語にも精通していたことをうかがわせるのである。例えば、後のトレフリツェントの宗教問答は、ヴォルフラムが難解な神学上の問題に対して明確な理解を持っていたことを証明する。フェイレフィスに敗北した者達として挙げられる人名のリストは、大部分ローマの地理学者 Julius Solinus の書物に由来する。[16] 惑星の名は、アラビア語天文学書のラテン語訳から借用されたと推測されているし、毒蛇の名前のリストは古代末期の Herubaium に由来する。[17] つまり、『パルツィヴァール』全体から浮かび上がってくるのは、文盲を主張しつつも、ときにはペダンチックと思えるほど、一方ならぬ知識の広さと深さを披露する矛盾的詩人像なのである。付け加えるなら、フランス語の使用頻度に関しても彼は宮廷叙事詩人の中で群を抜いている。ヴォルフラムのこれらの知識の源は、たしかにいちいち名を挙げてひけらかされるわけではない。前述のように、彼は決して自分が「読んだ」とは口にしないのである。それにしても、ラテン風、アラビア風の名詞を長々と並べて見せることは、文盲の告白とはあまりにも矛盾する印象を与える演出ではないだろうか。これらの点から考えても、「自己弁明」は、単なる自伝的告白ではない。語り手の発言として、受容者に働きかける何らかの機能を担っていることが予測されるのである。

Rade. Hrsg. v. George Friederich Benecke. Berlin 1819, V.6346.

[15] 例えばヴォルフラムの独・仏語文献についての知識に関して、最近ネルマンは、その語彙やモチーフの借用の仕方が非常に精密で、しかもごくわずかな部分（ネルマンはこれを Nest と呼ぶ）から集中して借用されていることを手掛かりに、それらが読書によって得られた知識であると推測している。Vgl. Nellmann, Eberhard: Zu Wolframs Bildung und zum Literaturkonzept des Parzivals. In: *Poetica* 28 (1996), S.327-344, hier S.327ff.

[16] Vgl. Bumke (1997), S.6f.

[17] Vgl. Groos, Arthur: Wolframs Schlagenliste (Parzival 481) und Pseudo-Apuleius, In: Domes, Josef (Hrsg.): *Licht der Natur, FS für Gundolf Keil*. Göppingen 1995, S.129-148, hier S.129ff.

3．原典詩人キオートの「学識」

文盲の告白が単なる自伝的なものではないとして、知識を得る手段としての書物とそれを引き合いに出すことによる真実性証明のメカニズムそのものをヴォルフラムが本当に拒絶してしまうのかというと、これも決してそうではない。物語が中盤まで進行すると、『パルツィヴァール』の直接の原典となった「学識あるマイスター」キオートの物語の存在が明らかにされ、ヴォルフラムはそこへの全面的依拠を述べ始める（453, 5f）。すなわち『パルツィヴァール』物語も、他の宮廷叙事詩同様、書物の形をとって伝承され、それを利用して現在のものが成立したことが明らかにされるのである。

「書物に拠らない」と言っておきながら、テクストの捏造を行なってまで[18] このような方向転換がなされなければならないのは一体何故であろうか。その問に対する回答は、先ほど述べたように伝統が権威として絶対の重みを持つこの時代の受容者達を前にしたヴォルフラムの態度を観察することで得られよう。

ヴォルフラムは、キオートに続き、さらにその原典となった、異教徒フレゲターニースによって星の運行の中に読みとられ、アラビア語で書き記された書物 gestifte をも紹介する。「この者（フレゲターニース）がグラールについての物語 des grâles âventiur を書いたのである」（453, 30）。占星術という、当時の人間にとっては十分信頼にたる情報収集の手段を用いてフレゲターニースが記し、トレド[19] で発見されたこの gestifte に加えて、キオートはさらに、作品成立のためにマツァダーンの家系についての史料を求めねばならない。今度はラテン語の書物の中に、である。

賢明なマイスター、キオートはラテン語の書物の中にこの物語を探し求めた。純潔を守

---

[18] ヴォルフラムの学識の実際と並んで、このキオートなる人物が実在したか否かも『パルツィヴァール』研究にとっての大きな問題点の一つであった。以前の研究にはこのキオートのテクストの存在を前提とするものも多かったが、現在では、テクスト比較によって、ヴォルフラムの実際の原典がクレチアン・ド・トロワのものであったことがほぼ確実視されている。Vgl. Bumke (1997), S.159ff.
ヴォルフラムはクレチアンのテクストの存在を無視するわけではない。だが、『パルツィヴァール』中、クレチアンに言及されるのはエピローグでの一回だけ、それも「トロワのマイスター、クレチアンはこの物語をあやまったやり方で伝えたので、キオートが腹を立てるのも無理はない。キオートは我々に正しく物語を伝えてくれている」（827, 1ff）と、キオートのネガティブな引き立て役としてである。

[19] トレドはイスラム圏に直接接するという地理的条件により、南イタリアと並んで 12 世紀ルネサンスを呼び起こす原動力となった、当時の学問の都である。膨大な量の書物、特に古典古代の自然科学と占星学のアラビア語文献がこの地でラテン語に再翻訳され、全ヨーロッパに大きな影響を与えた。これらの書物の中でも、特にプトレマイオスの天文学書がヨーロッパに与えた影響力は極めて大きい。フレゲターニースによって星の運行の中に読みとられた物語が、トレドで発見される。これは、当時の人間にとっては極めて信憑性の高い証言となったかもしれない。

ってグラールを守護するのに相応しい民はどこにいたのかと。彼はベルターネや、その他の地、フランスやアイルランドといった諸国の年代記を読んだ。そしてアンショウウェでこの物語を見出した。彼はマツァダーンについて読んだのだが、それは真実の、間違いないものであった。彼の一族全てについて、そこには正しいことが書かれてあった。そして他方、いかにしてティトゥーレルとその息子フリムテルがグラールをアンフォルタスにもたらしたかも書いてあったのである。このアンフォルタスの妹がヘルツェロイデであり、彼女との間にガハムレトは一人の息子を得た。この物語は彼についてのものである。(455, 1ff)

キオートは諸国の年代記を読みあさり、「真実の」「間違いない」情報を見つけた、と述べられる。すなわち、キオートは翻訳者としてフレゲターニースの書物を利用するだけでなく、望まれうる最も正当な手続きを経て、当時最も信憑性のある文学ジャンルである歴史記述を用い、さらに史料批判を行なって信頼できる最良の史料のみを（もちろん読むことによって）発見する、つまり物語の権威付けのためにこれまでの宮廷叙事詩人が費やした努力が、キオートという人物の姿を借りて再現されているのである。それも、彼らよりもはるかに極端で、熱心なやり方をとってである。

この、必要以上に強調される自らの物語の正当性の主張は、まずこれまでの Quellenlosigkeit に対する批判への回答ととらえられよう。つまり、「書物という舵を持たない物語」に対する保証である。特に物語が新しいテーマを扱うにあたり、受容者には、ヴォルフラムが嘘の、このジャンルには不適格な物語を語っているという非難が生じたというのはありうることである。[20] ヴォルフラムの発言は、しだいにこのような批判者達に対する弁明と対決の様相を呈しはじめ、自らの語りの正当化を図りはじめるかのように見える。「嘘」の物語はヴォルフラムの望むものではない。「偽りの物語は雪の上に放り出されるほうがましだと思われる」(338, 17ff)。

---

[20] 例えばゴットフリートは『トリスタン』の中で次のように述べる。Vgl. Gottfried von Straßburg: *Tristan und Isold.* Hrsg. v. Friedrich Ranke. 4. Aufl. Berlin / Weidmann 1959, V.4665ff. 「手品の鎖で偽りの物語を語って（liegent）愚鈍な人を欺き、子供たちにつまらない物で黄金を作って見せたり、魔法の箱の中からほこりでできた真珠を取り出して見せたりする、奇怪な物語の創作者達、話の種の密猟者達。彼らが我々に日陰を与えるとしても、それはせいぜい棒杭が作る程度の陰であって、五月の緑なす葉や枝や小枝の作る日陰ではない。彼らの与える日陰が客人達の目を喜ばすことはない」。「奇怪な物語の創作者・話の種の密猟者」という言葉はたしかに、「自己弁明」で表明されたヴォルフラムの態度に対応するように見える。ハルトマンとフェルデケ両詩人への賞賛の間に挿入されるこの辛辣な言葉は、直接名指しこそされないものの、ヴォルフラムの創作態度に向けられた批判であるとみなされている。ヴォルフラムとゴットフリートの間の Fehde に関する研究史については、Vgl. Bumke, Joachim: *Die Wolfram Eschenbach-Forschung seit 1945. Bericht und Biblioglaphie.* München 1970, S.144ff. 並びに、ders. (1997), S.15f.

占星術と歴史記述という、二つの異なるソースから得られた情報がキオートの中で統合され、物語の信憑性に関して、よりたしかな保証を与える。そしてさらに、フレゲターニースの gestifte が「洗礼によって」、つまりキオートのキリスト教徒としての立場によって新しい意味を獲得し、更にラテン語年代記からの情報を得て膨れ上がるように、ヴォルフラムによる原典言及は、ある報告がまったく別種のテクストによって如何に内容的に満たされ、補われうるかを暗示しているとも言えよう。書物の翻訳を繰り返すことによってつながってきた伝承史の最後の一片としてのヴォルフラムは、彼の物語がそのようなプロセスの最終的な、そして最高の形であると印象付けようとする。口承も含め、いろいろな形で伝わったであろう雑多なバージョンと区別される、「最終的な・正しい」物語を語るのだ、という主張に限って言えば、実はヴォルフラムの立場はゴットフリートをはじめとする他の宮廷叙事詩人のそれとさほど変わるわけではない。[21] 先述のように、たしかに全編を通じてヴォルフラムは自分が「読んだ」とは一度も口にしない。だが、キオートは確かに原典物語を読んで、それを書き記し、ヴォルフラムの時代にまで伝承されたことが明言されている。読むにせよ聞くにせよ、ヴォルフラムはそのキオートが語ったとおりに物語る、というわけであるから、物語の真実性の保証という点に注目すると、少なくとも当時の受容者にとってはキオートが実在したかどうかは二次的な問題でしかない。キオートという人物の姿を借りて、従来どおり書物が担っていた機能が『パルツィヴァール』に取り入れられていることこそ重要なのである。

ところが、詩人と学識との関係に関して、ここには非常に巧妙なトリックが仕組まれている。異教徒たるフレゲターニースはもちろんだが、原典研究的歴史家にしてアラビア語の書物の翻訳者たるキオートは、聖職者ではないのである。彼は la schantiure (416, 21) であると紹介された。この語については写本間の相違もあり、「歌手」あるいは「魔術師」のいずれか、意味が特定できないのだが、[22] いずれにせよ彼、マイスター・キオートは「僧」ではない。俗人なのである。俗人であるはずの人間が、ラテン語とアラビア語を習得し、その能力で書物からえた知識を総合してパルツィヴァール物語として書き記す。つまり、このキオートという人物に、これまで聖職者に担わされていた役割が移されて、それまで聖職者の占有物であった文字文化が俗人社会

---

[21] Vgl. *Tristan. und Isold,* V.131ff.「私はよく知っている。トリスタンのことを物語った者はたくさんいたが、彼のことを正しく物語った者は決して多くはなかったことを — 中略 — 彼、トマがトリスタンについて語ったような正しい、真実の物語を、私はロマンス語とラテン語の両種の本に懸命に探し求め、彼のような正しいやり方で詩作しようと努めた。そして、いろいろな書物を読みあさった挙句、ついにある本で、この物語がどんな風であったか、彼の叙述の全てを読むことができたのである。私が読んだ物語がどんな風であったか、高貴な心の人々が心を紛らわすよすがにもと、私は今自ら進んでそれをご披露するのである」。

[22] この、意味の曖昧な la schantiure という単語については Vgl. Lofmark, Carl: Zur Interpretation der Kyotstellen im'Parzival'. In: *Wolfram-Studien* 4. Berlin 1977, S.33-70, hier S.42ff.

に開放される、その第一歩が踏み出されているのである。

俗人にして、書物から得た知識を誇る。キオートには、先ほど見たように文盲を自称しつつも広く深い知識を披露するヴォルフラム自身の姿が投影されていると見ることもできよう。自ら騎士を名乗るハルトマンですら、詩人としては聖職者の領域から踏み出すことはできなかった。ところが、文盲を主張するヴォルフラムは完全に俗人の立場から語ることを予想させる。こうとらえた場合、ヴォルフラムによる文盲の告白は、Gelehrsamkeit そのものへの批判なのではなくて、それまでの聖職者による知識の占有に対しての態度表明と受けとることができるであろう。ヴォルフラムは聖職者の領域とは係わり合いのない人間として宮廷叙事詩を語る。彼は文字文化とそこから得られる知識そのものを決して軽視するわけではないが、聖職者の占有物としてははっきりと拒絶する。ヴォルフラムは、文盲の告白とキオートの存在により、いわば俗人による俗人のための文学の分野を開拓するのである。

4．手紙を書く騎士 ― 俗人社会に浸透する文字文化

文字文化の世俗社会への開放を予測させるのは、ただ作者達の次元に留まらない。『パルツィヴァール』には、情報伝達の手段としての文字を知る宮廷の住人達が他にも登場する。

第一巻、パルツィヴァールの父親ガハムレトは、ツァツァマンクを去るに際して、最初の妻ベラカーネに自らの手で書いたフランス語の手紙を残す。別れの言葉を述べた後、彼はやがて生まれてくる自分の子のために自分の一族についての情報を記す。

> 私の息子に教えてくれ、その子の祖父はガンディーンといい、一騎打ちに倒れた。また、その父はアドダンツといい、同じ運命に倒れた。この曾祖父の盾は無傷でいることのほうが珍しかった。この方は、血筋でいうとベルターネの出であり、ウテパンドラグーン様は従兄弟である。この従兄弟二人の父の名をここに記す。一人はラツァリエス、もう一人はマツァダーンという方である。このマツァダーン様はテルデラショイエという妖精にファームルガーンという国に連れて行かれた。妖精の心を固くつなぎ留められたからだ。私の家系はこの二人から出て、今ますます栄光に輝いている。このお二人から出た一族の人々は皆王冠を戴き、高き名声と栄誉を得てきたのだ。(56, 5ff)

身分の壁がまだ完全には閉鎖されてはいない中世盛期の貴族にとって、出自の高貴さを最終的に証明するものは、自らの家系をどこまで遡って証明できるか、であった。ガハムレトはその目的のために母語を使い、自らの手で文字として残す。グラールの伝承史が最終的に天体の運行にま

で遡ったように、ガハムレトの血筋も、複雑に入り組んだアルトゥース王の家系の始祖（マツァダーン）にまで遡る。過去に遡って情報をまとめ、それを後世に伝達する手段として、世俗の人間が母語を用いているのである。このような現象は、『パルツィヴァール』以前には考えられない。

情報の伝達手段としての手紙は、これ以外にも何度も登場する。ガーヴァンがアルトゥース王に助力を請う手紙（625, 16ff）。フランスの女王アンプフリーゼがガハムレトを呼び寄せる手紙（76, 23ff）。グラモフランツからイトニエーへの求婚の手紙（715, 1ff）。フェイレフィスが部下へ指令を出す手紙（785, 27ff）。グラモフランツの例だけはいささか不明瞭だが、他の例は全て、俗人たる彼らが自らの手で書いたことが明記されている。これらの例は、俗人が文字を書く、そして読むという行為が、ヴォルフラムの時代にしだいに聖職者の占有物ではなくなり始めていたことを暗示する。もちろん、文学作品の中に描かれていることがすべて現実を反映している、という意味ではない。だが、俗人が文字を扱うという描写がこれほど頻繁に登場するという事実は、ヴォルフラム自身の例とあわせて、少なくともその事態を受容する準備ができ始めていたことを示唆すると言ってよいであろう。そのことを確認するには、過去の宮廷叙事詩と比較してみればよい。『パルツィヴァール』には、俗人と聖職者を隔てていた絶対的な壁はもう存在しないのである。

単に文字の読み書きだけではない。ヴォルフラムの文盲の姿の背後に垣間見える — そしてキオートにも反映されていた — 書物を利用し、俗人にして諸学に通じた人間像もまた、本編中の複数の登場人物に体現されている。

第六巻では、グラール世界とアルトゥース宮廷の渡し役にして「魔女」surziere とあだ名されるクンドリーエが、パルツィヴァールによる問の不履行を非難しにやって来る。彼女もまた、聖職者にあらずして「学識のある」人物である。

> 彼女には学識があって、あらゆる言語 — ラテン語、アラビア語、フランス語 — を立派に話した。また諸学に深い造詣があって、論理学と幾何学に通じ、天文学の知識もあった。その名はクンドリーエ、あだ名は魔女であった。雄弁で、口のなえないこの女は、今ここで華やいだ楽しみを打ち砕いてしまったのだ。彼女はこのように高い知識を持っていたが、世にいう「美しき人々」の部類には入らなかった。（312, 19ff）

フランス語とラテン語はともかくとして、当時アラビア語が活用されるとしたら、それは先ほどのキオートがそうであったように、純粋にアラビア語の書物から学術的情報を得るためである。人工的に獲得した言語でキオートが天文学書や年代記を読み漁ったように、クンドリーエもまた

その言語能力を利用して諸学を修め、特に天文学の知識は極めて豊富である（782, 1ff）。しかし一方、彼女の容貌は非常に醜いものとして描写される（313, 16ff）。この描写は、あるいは学識ある女性というものに関する当時の宮廷社会一般の偏見を物語るものかもしれないが、しかし、学識そのものに対する非難として捉えられる必要はない。事実はその逆で、クンドリーエの外見上の醜さとの対比により、受容者はグラールの真理を語るこの女性の内面の美を「読みとる」[23] ように誘導されるのである。

『パルツィヴァール』におけるもう一人の「読者」は、主人公の叔父にあたる人物で、パルツィヴァールに神と罪とを説く隠者トレフリツェントである。非常に学識が高く、書物を読むことができる人物として描写される（459, 21f）彼もやはり、聖職者となるべく教育を受けた者ではない。かつては騎士であったものが、グラール王である兄の不幸な運命に絶望して隠遁した身である。にもかかわらず、彼は、パルツィヴァールが抱く神への不信に対して、聖書からの引用と神学の知識を用いつつ明確な解答を示し、さらに自分が神を理解するのに書物がどれだけ有用であったかを説いて聞かせる。

> 私は俗人であったが、真実の本に書かれてあることを読む術を心得ており、おかげで、神が人間の魂が地獄に堕ちぬようにと助けの手をさしのべられたこと、それ故人間はその方の偉大な助けを求めて奉仕すべきであると、そう書き記すことができた。(467, 11ff)

トレフリツェントは明らかに読書能力を有し、知識を拡大させる手段としてそれを活用している。キオート、クンドリーエ、そしてこのトレフリツェント。『パルツィヴァール』において、グラールに関係し、その真理を追究しようとする人物はことごとく読書の能力に重きをおく。グラール物語の伝承史の最後の一人としてのヴォルフラムもまた、騎士として文盲の仮面を被りつつも、書物から得た知識を披露するのである。

そして実は、これらの人物の中心にあり、文字通り物語の核となる聖石グラールもまた、俗人によって読まれるべき一種のテクストとみなすことができるのである。このグラールの表面には、神の意志を直接示すという文字が現れ、ムンサルヴェーシェの騎士達に指令を出す。例えば、グラール共同体の構成員を補充する必要があるときには、その新たなメンバーを求めて旅に出るべき人物（例えば後のロヘラングリーン）の名がグラール上に現れる。

---

[23] Dallapiazza, Michael: Häßlichkeit und Individualität. Ansätze zur Überbindungen der Idealität des Schönen in Wolframs von Eschenbach Parzival. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 59 (1985), S.400-421, hier S.419ff.

聖石の縁には、文字が（ひとりでに）刻まれ、聖なる旅に出る人物 — 少年か少女 — の名前とその家系が示される。この文字を削り取る必要はない。旅に出るべきものが自分の名を読めば、それは消えてしまうからだ。(470, 23ff)

ヴォルフラムはここに、神と人との間の契約を文字として描く。[24] 教会を通さず、俗人と神が直接コンタクトをとる手段さえ獲得されているのである。そして、この契約を保ち、グラールを守護するには、騎士は文字を読む能力を持たねばならない。最初のグラール城訪問で、未熟で無知なパルツィヴァールにとってグラールは、神聖な書物としてよりは、華麗な装飾品として現れる。彼はその美しさに魅了されるが、グラールが発するメッセージの真の意味をつかむことはできなかった。その結果、アンフォルタスへの問を怠った彼は、神を呪うほどの苦境の中に立たされることになる。このパルツィヴァールの最初のグラール城訪問に象徴されるように、ヴォルフラムは、俗人にとっての文字文化の重要性を示しつつも、彼らによるテクストの誤読、誤解の危険性をも意識しているといえるだろう。また、『ペルセヴァル』を未完に終わらせたクレチアンに対する「この物語を正しく語っていない」(827, 1f) との批判は、断片的な読書という行為に対して彼が抱いた危惧も感じさせる。それ故に、パルツィヴァールがグラールの意味を理解できるのは、騎士として、そしてキリスト教徒としての長い教育を受けた後でなければならないのである。旅の終わりに、今度こそ過たずアンフォルタスを憐れむ問を発したとき、グラールには再び新しい文字が現れて、パルツィヴァールをグラール王に指名する。

グラールの上に文字が現れて、パルツィヴァールを王に指名した。これ以外の方法で王が選ばれたことはなかった。彼が王であり、主であることが皆に宣告された。(796, 17ff)

この『パルツィヴァール』の幸運な結末は、テクストを正しく理解しようという試みが最終的に成功したことに帰せられるのではないだろうか。主人公は最終的に、テクストの誤読という危機を乗り越え、グラールのメッセージの意味の解読に成功することで、至高の地位に就くのである。と同時に、ヴォルフラムも、キオートが物語ったとおりにパルツィヴァールの物語を「正しく申し上げ、彼をあらかじめ幸運の定めていた場所に導いた」(827, 18ff) と述べる。聖職者ではない、俗人たる彼が原典物語を正しく理解し、完全な形で再現できたことを誇るのである。

---

[24] 『ティトゥーレル』には、グラールをモーゼの十戒の石版に比するような描写も見受けられる。Vgl. *Titurel*, 6. Strophe.

5．おわりに

こうして「学識」と「書物」という二つの概念に注目して『パルツィヴァール』を見ていくと、ヴォルフラムが、12 世紀を通じて俗人の世界で文字文化の重要性が上昇してきた、その証人であることが見てとれよう。この作品に登場する騎士や婦人達は、自らの手で文字を記す。彼らは書物を「読む」という手段によって、聖職者達と同じくらい深い知識を手に入れことができる。それどころか、グラールを「読む」という手段によって、教会を通さずに神と直接コンタクトをとる手段さえ獲得している。この点で『パルツィヴァール』は、文化面でも信仰の面でも唯一絶対の権威を要求する教会への挑戦とも見なされうるだろう。宗教的テーマを扱いながら聖職者や教会が一切登場しないのもこの作品の特徴である。

クンドリーエやトレフリツェントは、キオート同様、聖職者のグループには属さない。そのような人間が、科学や宗教についての、本来はラテン語で交わされるべき議論を行なう。グラール共同体の騎士達も、聖職者のグループには属さない。にもかかわらず、文字を通して神と直接交流する手段を有する。聖職者達の特権であったものをいわば盗用しているわけであり、ここには、俗人が書物に近づきうる立場を手に入れて初めて可能になった、俗人文化と聖職者文化の間の権力闘争[25] が反映されていると言える。ヴォルフラム自身がなぜあれほどに文盲にこだわったのか、その謎はこの二つの文化の関係を念頭においてはじめて理解できるものとなろう。文字文化というものは、これまで完全に聖職者の占有物であって、司教座聖堂付属学校や修道院付属学校の中でのみ許されるものであった。もうしばらくすれば、これに大学と都市が加わることになり、文字・書物文化の窓口も少し広がるが、ヴォルフラムの時代にはまだその実をつけるまでには至っていない。二種の学校に続いて、宮廷こそが、文学を糸口として文筆活動が行われる三つ目の場所に成長していったのである。ヴォルフラムの文盲の告白は、彼を（正規の教育による）学識なき者として聖職者の領域から遠ざけ、あらたに文字文化への糸口を掴みつつあったこの俗人の領域にあえて結びつける。あくまで俗人として、彼の属する宮廷社会のために、彼は語るのである。それでいて広い学識をちりばめながら進行する彼の作品は、登場人物達も含めて、聖職者のグループに属することなくして同じ高みの文化を受容できることを証明しようとする努力に満ちている。『パルツィヴァール』は、二つの文化のせめぎあいの中で、その自立性を自分の言葉で主張しようとする宮廷文化の新しい試みなのである。

---

[25] Groos, Arthur: *Romancing the Grail: Genre, Science and Quest in Wolfram's 'Parzival'*. Ithaca / London 1995, S.169.

Der Ritter liest und schreibt
— Über die Schriftlichkeit in Wolframs „Parzival" —

AOKI Sanyo

Die höfischen Epiker des deutschen Hochmittelalters, die zum größten Teil lateinisch gebildet waren und sich daher manchmal auch *pfaffe* nannten, legten großen Wert auf die Tatsache, dass ihre Werke schriftlich abgefasst waren. Gegenüber dem weltlichen Hofpublikum, das zumeist aus im Lesen und Schreiben Ungebildeten bestand, hoben sie hervor, dass sie ihren Stoff aus 'Büchern' schöpften. Bis zu dieser Zeit waren die weltlichen Autoren von der Schriftlichkeit fast völlig ausgeschlossen gewesen.

Aber Wolfram verstößt gegen diesen Topos. Wenn man die so genannte Selbstverteidigung (*Parzival* 115,27ff) wörtlich nimmt, dann war Wolfram Analphabet. Ob die Angaben des Selbstverteidigung jedoch wirklich autobiographisch interpretiert werden dürfen, ist unsicher. Besonderes Gewicht kommt dabei den Nachweisen der Forschung zu, dass Wolfram seine Fachkenntnis auf den Gebieten der Medizin, der Kosmologie, Astronomie, Theologie usw. lateinischen Quellen entnommen hat. Selbst das Bekenntnis der eigenen Unbildung bezeugt bei näherem Hinsehen nichts anders, als dass Wolfram mit wesentlicher Elementen der lateinischen Bildungstradition vertraut war.

Ich halte das Bekenntnis Wolframs, Analphabet zu sein, für den Teil einer literarischen Auseinandersetzung mit dem Ziel, sich gegenüber den bildungsbewußten, quasi-geistlichen Epikern abzugrenzen, und habe daher die Bedeutung von *gelêret* und *buoch* für Wolfram näher untersucht.

Im „Parzival" gibt es viele Personen, die nicht dem geistlichen Stande angehören, gleichwohl aber lesen und schreiben können. Sie, die Laien, lesen lateinische Bücher und wechseln untereinander Briefe. Parzival kann sogar das geschriebene Wort Gottes direkt auf dem *grâl* lesen. Ebenso wie Wolfram selbst verfügen auch seine Protagonisten in Wahrheit über eine tiefe Gelehrsamkeit, wobei sie aber durchaus als

Vertreter des weltlichen Standes gezeichnet sind. Was die Schriftlichkeit betrifft, gibt es im „Parzival" keine absolute Grenze mehr zwischen der Geistlichen- und Laienkultur. „Parzival" ist ein Beweis dafür, dass auch weltliche Personen in dieser Zeit nach und nach die Schriftlichkeit errungen haben.